

白紙

モンチャル

訪問者

「ねえあなた、ジンのことなんだけどー」

杉本景子は朝食の準備をしながら夫の孝雄に話しを切り出したが、後にしてくれ、と鋭い声で遮られた。

いつものことだが、やはりため息をついてしまう。

一通りの料理をテーブルに並べると、険しい顔で経済新聞を読む孝雄に背を向け、景子はコーヒーを淹れる。

「昨日ね、ジンに髪を切ったらって言ったんだけどーあっ、ほら、あの子ずっと髪を伸ばしっぱなしで不潔に見えるじゃない？　なのに、別にこのままでいいっていうの。せっかく可愛い顔してるのに、あんな髪してたら台無しだと思わない？」

孝雄は景子の言葉を見向きもせず新聞を置くと、食事を始めた。

息子のジンが大学受験に失敗し、部屋に引きこもり始めて2年が経つ。志望大学へは余裕を持って入れる学力があったはずなのに、なぜ滑り止めにまで全て落ちてしまったのか。景子は未だそのことを解せずにいる。

夫の孝雄は落第を知った日、我が子であるジンを出来損ないと罵倒し、殴りつけた。

あの日以来、ジンと孝雄は一度も口を利いていない。それどころか、同じ家に住んでいながら2年間一度も顔を合わせていないのだ。

「景子」

コーヒーのおかわりを注いでいると、不意に孝雄が名を呼んだ。

「なに？」

「お前の淹れてくれるコーヒーはうまい」

「どうしたのよ、突然」

「べつに」

「もう、変な人」

景子はまんざらでもない顔で笑った。やはりわたしは、この人を愛している。ジンの将来は心

配だけど、この人が居てくれるんだもの、きっと大丈夫。何とかなる。景子は自分にそう言い聞かせて孝雄を見送った。

孝雄が仕事へ行くと、景子はジンの朝食の準備をし、2階にある部屋の前に運ぶ。2年間毎日繰り返してきたことだ。

「ジン、起きてる？」

起きてるよ、と抑揚のない返事。

「朝ごはん置いておくからね」

ありがと、すぐ食べる。それだけ聞くと景子は階段を下りた。そして自分も朝食を取り、キッチン片付け、部屋の掃除に取り掛かる。

一等地に建てられたデザインハウスは、築年数こそ古くなってしまったが、洗練された内装と外観を持つ美しい家だった。商社勤めのエリートマンだった孝雄は、わずか30歳でこの家を建て、翌年にはジンが生まれた。景子はジンが受験に失敗するまでの18年間、子育てに苦労しながらも、有り余るほどの幸せをこの家で味わってきた。たくさんの思い出があふれる大切な家を、額に汗を滲ませ掃除する。細かい隙間の埃までしっかりと拭き取り、磨き上げる――と、その時、不意にチャイムが鳴った。手を止めて玄関へ向かうと、ドア越しに澆刺とした男の音が響く。

「おはようございます。杉本様、いらっしゃいますか？」

「はい、どちららさま？」

「わたくしSKカンパニーの岡田と申します。今日は家庭用ウォーターサーバーのカタログを杉本様に見て頂きたくてお伺いしました」

「家庭用ウォーターサーバー、ですか？」

「はい」

景子がドアスコープを覗くと、いかにも訪問販売のセールスマン然とした、にこやかなスーツ姿の男が立っているのが見えた。

「浄水器はあるんだけど、ウォーターサーバーか……。あると便利かもしれないわね。話しだけでも聞いてみようかしら。」

景子がチェーンを外してドアを開けると、男は身体を斜めにして滑り込むように家の中へ入ってきた。その動きがあまりに俊敏だったので、景子は小さな悲鳴をあげてしまう。

「あっ、申し訳ございません。驚かせてしまったようで」

息を呑むほどハンサムな顔をした男が、恐縮して頭を下げた。ドアスコープの魚眼レンズでは気付かなかったが、男は長身でスタイルも良く、まるで映画俳優かモデルのように見える。年齢は30代前半だろうか。日に焼けた顔は精悍で、力強い光を放つ目が印象的だった。よく見るとスーツの下から薄っすらと筋肉が隆起していて、脱いでも期待を裏切らない肉体であることが安易に想像できた。

景子は思わず顔が熱くなってしまうのを必死に抑えながら、

「い、いえ、いいんです」

「改めまして、わたくし岡田正樹と申します。SKカンパニーの家庭用ウォーターサーバーの販売をしているんですけど、今日は是非、奥様にこちらのサーバーを知っていただきたくて訪問いたしました」

岡田正樹はアタッシュケースからカタログを取り出して景子に渡すと、商品の説明を始める。その声は明瞭で、景子のどんな細かな質問にも迷いなく答えた。訪問販売のプロというのは、大抵押しが強く、一方的に話しを展開させて強引に契約までこぎつける。しかし、岡田の営業は全く逆だった。会話の駆け引きが巧く、こちらの話しに耳を傾けるべきところと、自分の意見をいうべきところをしっかりわきまえている。料金に関する嫌な質問も投げてみたが、岡田は真摯にそれに答え、景子は益々好感を持つ。

経済的なことでいえば、ウォーターサーバーを置くことはさして家計を圧迫しない。孝雄の稼ぎは充分すぎるほどある。しかし、このとき景子は、ウォーターサーバーのことなどどうでもよくなっていた。自分の手にしたカタログを覗き込む岡田正樹の顔が数十センチの所にあって、年甲斐もなく胸がどきどきしていたのだ。そして景子は、抱いた疑問を思わず口に出してしまう。

「あの……岡田さん」

「はい」

「あなたはずっとこのお仕事をされてるんですか？」

「ええ、そうです」

岡田は何故そんなことを訊くんだろう？ と、不思議そうに景子を眺める。

「いえね、あなたがあんまりハンサムだから、俳優さんやモデルさんをやっててもおかしくないのになって思っ」

岡田は一瞬キョトンとしたが、すぐに声を上げて笑った。

「あははっ、ありがとうございます。残念ながら奥様、わたしはただの訪問販売員です」

「そうよね。なに言ってるんだろあたし」

照れ隠しに微笑んだ景子は、サーバーを家に置くことを岡田に告げた。

岡田は弾けんばかりの笑顔を景子に向け、契約書を取り出す。

「こちらに必要事項を記入して郵送していただければ、早くて3日で商品が到着しますから」

「わかりました」

適当な世間話をしながら契約書にざっと目を通し、景子が顔を上げた次の瞬間、時間が止まった

。

目の前にハンマーを握った手を大きく振り上げている岡田正樹の姿があったのだ。

それは時間にすればほんの数秒のことだったが、景子は一瞬にして様々なことを思考できた。

——この人、どうしてカナヅチなんか持ってるの？

「悪いな、奥さん」

岡田正樹の腕が、まるでコマ送りのようにゆっくりと振り下ろされる。

景子の眼はその姿を正面に捉えながら、脳には別のイメージが光の速さで駆け抜けていた。

両親の愛を一身に受けて育った幼少期。少女時代を過ぎ、大学のサークルで孝雄と知り合ったこと。社会人を数年経験して恋愛結婚したこと。愛する夫との間にジンが生まれたこと。ジン

が生まれてからこれまでのこと。ずっと懸念していたこの子の未来。

泣いたこと、笑ったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、すべてがありのままの感情を持って景子の心を駆け抜けた。

――なんだ、あたし意外と幸せな人生送ってきたんじゃない。

ジン、母さんが居なくなっても、ちゃんとしなきゃダメよ。

それはまるで、哀れな羊に神が与えた最後の慈悲のようだった。

景子は郷愁にも似た穏やかな気持ちに包まれながら、側頭部へ近づく鉄の塊を見た。

――あたし、やっぱり殺されるの？

「死んでくれ」

岡田の低く、くぐもった声が聴こえた瞬間、景子の意識は消滅した。

「ジン、起きてる？」

ドア越しに母の声を聴き、杉本ジンは朝になったことを知る。
部屋のカーテンは隙間なく閉められ、明かりといえばパソコンのディスプレイだけだ。
広い部屋は整理整頓こそ行き届いているが、どこか陰湿な空気で満ちている。

「起きてるよ」

ずっと黙っていたせいで声が出づらく、抑揚を欠いた返事になってしまう。

「朝ごはん置いておくからね」

「ありがとう、すぐ食べる」

母が階段を下りる音を確認し、ジンはそっとドアを開ける。

床に置かれた盆の上には、湯気を立てる味噌汁、焼き魚、サラダに納豆、カットフルーツまである。バランスの取れた朝定食だ。

ジンの母、杉本景子は、彼が引きこもるようになって間もなく、こうして作った料理を部屋の前へ運ぶようになった。何もしないと夜中にジンが冷蔵庫の物を食べ荒らすから、という建前だが、実のところ、これは息子へ対する母の率直な愛情だ。今がどんな状態であれ、やはり我が子は可愛い。健康を損なわないように手料理を食べさせたかった。

ジンは朝食を部屋へ運んで明かりをつけると、両手を合わせ「いただきます」と囁いて食事を始めた。

一般に認知されている引きこもりと杉本ジンのそれには、若干の相違がある。

ジンは父親が出勤してしまえば比較的部屋の外にも出たし、母親とは普通に会話をしていた。日中の外出は滅多にないが、両親が寝静まった深夜、コンビニへ買い物に行くことはよくある。景子は夫に内緒でジンにクレジットカードを渡していたのだ。1ヶ月に使っていい額は3万円まで、という約束だが、部屋からほとんど出ないジンには十分な額だった。それに、風呂には最低でも2日に1回は入ること。これも引きこもるようになってから母に約束させられたことだった。肩まで伸びた髪は寝癖で四方に散らかっているが、この約束のお陰でジンの身体はつねに

清潔に保たれている。

社会から孤立してもジンが素直さを失くさずにいられるのは、マイペースで穏やかな気質の景子のお陰だ。ジンは口にこそ出さなかったが、わがままを許してくれる母にいつも感謝していた。

「ごちそうさまでした」

もう一度手を合わせて囁くと、ジンは盆を部屋の外へ出す。
ちょうどその時、玄関のチャイムが鳴った。

「おはようございます。杉本様、いらっしゃいますか？」

男の声はよく通り、2階に居るジンにまで一語一句ハッキリと聞き取れた。ほどなくして母が対応し、会話の内容から男は訪問販売のセールスマンだとわかった。

ジンはドアを閉めて鍵をかけると、デスクチェアに座ってパソコンのディスプレイを眺める。画面にはついさっきまでチャットをしていた女子高生、前川美姫との会話が表示されている。

ジンはチャットの続きを始めた。

”お待たせ、朝ご飯食べ終わったよ”

”おかえりーv(´▽`*v)”

”ただいま”

”今朝は何食べたの？”

”納豆とか、味噌汁とか、普通の和食”

”そうなんだ”

”うん”

”あのね、いきなりで驚かれちゃうかもしれないけど、あたし今日はジン君にどうしても聞いてもらいたいことがあるんだ……”

”うん、なに？”

”あたしね、実は……”

不自然に長い沈黙。

”ん？”

悩み事でもあるのかと思い、心配になったジンは指を走らせる。

”どうした？ 何かあったの？”

”あたし、ジン君のことが好きみたい……”

”えっ？”

”こんなのって変だよな……”

——変だよ、それは。

ジンは反射的にタイピングしそうになるのを寸での所で止めた。

前川美姫と知り合ったのは半年前だが、彼女のことはネットを介してしか知らないのだ。ジンは方は、理由こそ伏せたが、自分が引きこもりであることや、粗方のプロフィールは嘘偽りなく告げている。しかし、前川美紀に関しては、名前も、年齢も、性別も、どれ一つ本当なのかわからない。お互いの顔も知らなければ、声も聴いたことがない。それなのに、こうしてチャットをしているだけの相手に恋愛感情を抱けるのだろうか。ジンには美姫の気持ちが理解できなかった。

”変だとは思わないけど……”

”今度、会ってくれないかな？”

”会うって言っても、確かミキちゃんはこちらから電車で2時間以上かかる場所に住んでるんだよね？ 僕が今どういう状況かも知ってるわけだし、ちょっと難しくないかな……”

”会いたくないの？ あたしと”

”そうじゃないんだけど……”

”じゃあ何で？ あたしが電車に乗ってジン君のとこまで行くから、それでいいでしょ？”

”う～ん……ごめん、ちょっと難しいかも……”

美姫の次の発言が表示されるまでにはかなりの間があったが、ジンもどう声を掛けていいのかわからなかった。

”ひどいよジン君……あたし、こんなにジン君のこと好きなのに……”

”ほんとにゴメン。ミキちゃんとはこれからも友達として仲良くしていきたいんだ”

そう打ち込んでからどれだけ待っても、美姫の返事はなかった。

――何だか苦手な展開になってきたな。

昼夜逆転の生活だから当たり前なのだが、今頃になって疲れと眠気が襲ってきた。

それにしても、半年も仲良くチャットをしてきた相手をこんな形で失うのはつらい。

ジンが重いため息をつくのと同時に、1階から笑い声が聞こえてきた。さっきのセールスマンと母が、随分楽しそうに会話している。

美姫に自分の秘密を打ち明けるべきだろうか……。

ジンはしばらく迷ったが、観念したようにキーを叩いた。

”ミキちゃん、まだいる？”

”うん……”

”ミキちゃんと知り合って、半年くらい？　すごく楽しかったよ。でも僕たちってさ、お互いの顔も知らないし、声も聴いたことないし、”

”顔がわかればいいの？”

”ううん、そうじゃなくて、僕たちまだ知らないことだらけじゃん？　僕もミキちゃんとは毎日チャットしてても全然飽きなくてさ、こんなに長くチャットが続いた人って始めてだよ。でもね、どうしても無理なんだ”

――だって僕は、同性愛者だから。

そう打ち込もうとしたとき、美姫から突然写真が送信されてきた。チャット画面に小さなサムネイルが表示され、ジンは嫌な予感を覚えながらそれをクリックする。

拡大表示された写真には、信じられないほど醜く太ったセーラー服の少女が写っていた。その太り方は尋常ではなく、もはや病気を疑うレベルだった。顔は一応笑顔らしいが、ごつごつした岩のような頬肉と脂肪が上下の瞼を圧迫し、目は一本の線のようにになっている。それに、歯茎ごと剥き出しになった黄ばんだ歯。所々が虫歯で黒くなっていて、見ているだけで不快だった。艶のないロングヘアは傷み切って解れた糸のようになり、まるで童話で見た山姥とアメコミに出てくるミュータントが合わさったような外見だ。

”これ、ミキちゃんの写真？”

”そうだよ”

美姫はジンの反応を伺っているように何も発言しない。

ジンは今すぐにでもチャットウィンドウを閉じたい気分だった。

美姫には申し訳ないが、さきほどの流れからこの写真を見せられたら、たいていの人は引いてしまうだろう。

”あたしも送ったんだから、ジン君も写真送ってよ”

——自分で勝手に送ってきたのに……。

”その前に、ちょっと僕の話聞いてくれないかな？”

”なに？”

”実は僕、”

続きを打ち込もうとしたとき、突然「ドン！」と大きな音がした。

音の出所は1階のようだが、床に何か重いものを落としたような震動が2階にまで伝わってきた。

”ごめん、ちょっと待って”

”え？”

——何だろう、さっきの音……。

ジンは椅子から立ち上がって部屋のドアに耳を当てる。

さっきまで楽しそうに会話していた母とセールスマンの声が急に消えた。

しばらく耳をすましても、不気味な静寂が続くのみだった。

ジンが横目でパソコンのディスプレイを見ると、チャットの発言欄に信じられない言葉が次々と表示されていく。

”ねえ、何してんの？ 今あたし真剣にジン君の話聞こうとしてるのに、このタイミングで居なくなるっておかしくない？”

”ってかさ、今パソコンの画面見てるんでしょ？ 何とか言いなよ”

”ふーん、ジン君もやっぱそういう人だったんだ？ あたしがデブでブスってわかったから、今まで楽しくチャットしてたのに急に態度変えるんだ？ 外見が気持ち悪いからってそうやって逃げるんだ？ 拒絶するんだ？ 最低だね、アンタ”

”何とか言えよ、居るんでしょ？ そこに”

”写真も見せらんないってことは、どうせアンタだってたいした顔してないんだろ？ 調子のんなよクズ。受験に失敗したくらいで引きこもりとか情けな。恥ずかしくないの？ 将来は誰かの助けになりたいとか言ってたけど、アンタみたいな出来損ないに何ができんだよ。一生引きこもってるバーカ！”

——何も知らないくせに……。

ジンは心底つかれ切ってしまい、美姫に反論する気力さえなかった。

このままパソコンの電源を切って寝よう。美姫とはこれっきりになるだろうが、もうどうでもいい。とにかく今は睡眠だ。

ジンがドアから離れかけたとき、誰かが階段を上ってくる微かな音が聴こえた。

もう一度ドアに耳をつけ、意識を集中する。

足音は少しずつ近づき、やがてジンの部屋の前で止まった。

——何だよ……。

不安になったジンが、

「母さん？」

と呟いた瞬間、爆撃を食らったような衝撃を受けて体が後ろへ吹っ飛んだ。

間抜けな悲鳴を上げて腰を抜かしたジンの目の前で、ドアが激しく打ちのめされる。何が起こったのかまったく理解できないまま、狂ったように上下するドアノブをジンは眺めた。

そして、その音が急に止んだとき、低く割れた獣のような声がドア越しに響いた。

「開けろ」